

姉兄私妹妹

青井 愛実

五人兄弟!?いつもびっくりされるけれど、最初から五人だったわけではない。私だって、末っ子時代があったのだ。まわりの人から、それはそれは千ヤホヤされて甘やかされていた。

しかし、妹がうまれ、さらに妹がうまれ、私の末っ子時代の幕はとじ、完全なド真ん中次女になってしまった。おまけに、姉も妹も母似で、よく私だけ似てないねと言われる。

末っ子時代は、だれにも比べられず、ただ存在するだけでかわいがられていたのに。

私だけどこがちがうような、私だけ血つながってないと思うくらいいつもモヤモヤしていた。

長女とはとしがはなれているので、ほぼ生活スタイルがちがうため、私は末っ子時代から一気に長女の役目もしなければならなくなつた。大いなるプレッシャーや、自分の心を

おし殺して、妹の気持ち優先し、さらに、母のごきげんとりなど、気が休まることになかっ

た。よいこともあり、いつも兄弟や家族の空気に気をつかっているため、クラスの友達や大人の人達にも気を配れるようになった。

また、いつもがまんしているからと、母はよく私とテートしてくる。マツサージや酔素風呂、ショットピングなどに連れだしてくれることも私のお気に入りになっている。

二人の妹は、いつも一緒に遊んでいる。だいたいごっこ遊びから歌いだし、ミュージカルになる。二人はけんかするけど仲が良くて、悩みそがっながっているのではないかと思うほどだ。にくたらしくて、にくめない、何だかんだ言っても、かわいい二人を、私はうらやましいと正直思っている。

妹だけではなく、姉も私にないものを持っていて、良い意味でも悪い意味でも注目されるのだ。兄は、言うまでもなく母の推して、

母だけでなく妹たちからも絶大な好意を受けている。私のスマホの中の兄の名前は、世界一のお兄ちゃん、だ。姉も兄も自由人だけど、私にとってはあこがれの存在なのは認めざるをえない。

母に一度だけ聞いてみたことがある。五人の中でたれが一番かわいいかと。母は迷うことなく、こう答えた。

「決まってるじゃない。答えは愛実が一番わかってるはずよ。愛実が一番かわいだよ。世界で一番よ。だけどみんなには内緒ね。」

いつも適当人間な母も、たまには良いこと言うな、と思っただ。私は私で良いかもなと心から思っ、とりあえず今日も母のうまいごはんをたくさん食べよう。